

アドロー 阿蘇はADRO (Aso Disaster Recovery Organization) で戻ろう!

救急部
助教 高橋 善明

2016年4月14日21時26分、熊本地震発生。私は急ぎ職場に向かい、DMAT (Disaster Medical Assistance Team) 出動に備えた。結局、災害急性期に対応するDMATとしての出動要請はなかったが、発災12日目の4月26日、私は静岡県医療救護班浜松医大チームの一員として、熊本県阿蘇市にある阿蘇医療センターへ派遣されることとなった。

阿蘇医療センターは阿蘇医療圏のほぼ中央に位置する、医療圏唯一の災害拠点病院である。免震構造で建物被害はほとんどなく、私たちが訪れた際にはライフラインもほぼ復旧していた。私たちは阿蘇医療センター内に設置されたADRO事務局に入り、ロジスティクス業務(医療チームの人的・物的支援、業務調整、情報連絡処理等)を行うこととなった。

東日本大震災で亜急性期～慢性期の医療ニーズの把握や医療支援チームの配置調整が困難な状況が生じたことを踏まえ、二次医療圏単位での地域災害医療対策ネットワーク構築や、それを取りまとめる災害医療コーディネーターの設置が現在全国各地で進められている(救急災害医学講座 吉野教授は県西部統括災害医療コーディネーターである)。しかし阿蘇医療圏ではこのような制度は定められておらず、熊本県からの指示でこれを代行したのがADROである。つまりADRO事務局は阿蘇医療圏の医療支援の中心となる場所であり、私たち浜松医

大チームは図らずもこの中核に入ることとなったのである。

ADRO事務局はまず、多数の医療支援チームを取りまとめ、各々に役割を振った。各避難所や施設を巡回する役割を受けたチームは、そこで医療ニーズを収集した。収集した医療ニーズを基に、必要とされる人的・物的資源がアセスメントされ、それぞれ適切な場所に供給された。例えばある避難所でノロウイルスが発生し感染対策が必要と判断したら、ICT(Infection Control Team)を立ち上げて、罹患者への対応や衛生環境の改善に取り組んだ。さらに複数の病院でスタッフ(特に看護師)が疲弊していると判断したら、医療支援チームのメンバーを夜勤業務の代行に派遣した(現地の病院スタッフは車中泊や避難所生活を続けながら、休むことなく通常勤務を続けていた)。また毎夕には保健所、病院、救護班、地元医師会、消防など、関係各機関の代表者がADRO事務局に集まり連絡会議を開催した。ここで各機関からその日の報告を受け、最後に明日以降の活動方針を皆で共有した(この会議の議事録作成こそ、私たちが最も労力を要した業務であった)。

4泊5日の救護班活動であったが、私たちはそのほとんどをADRO事務局内で過ごした。私自身はこれまでDMATとしての災害急性期の活動しか想像していなかったのだが、この救護班活動を通じ、亜急性期～慢性期の災害医療を体感

することができた。ADROが掲げていた活動ポリシーは、「すべては被災者のために」と「保健師さんを支える活動を」の2つであった。医療救護班としての活動は被災者支援が目的であることは言うまでもないが、その最終目標は救護班が構築した医療ネットワークを地元の保健医療体制に、スムーズにお返しすることなのである。

「阿蘇はADROで戻ろう!」ADROの入り口にスタッフの誰かが掲示した、洒落のようなこのフレーズがまさに、災害医療の慢性期に最も必要なことを示してくれていた。夕日に照らされた美しい阿蘇の山々を見て熊本の一日も早い復興を祈りつつ、浜松へ戻ったら日々粛々と次の災害への備えを進める決意をして、私は帰路についた。最後に、救護班派遣に関し勤務調整や資機材準備など、バックアップしてくれた全てのスタッフに心からお礼を申し上げたい。



多機関が集うADRO連絡会議の様子



ADRO事務局前で、浜松医大チームのメンバーとともに(中央が筆者)

Special Feature 寄稿

熊本地震支援活動報告

浜松医科大学災害支援サークルLuce 代表
医学部医学科3年 稲葉 和真

浜松医科大学災害支援サークルLuce (ルーチェ)では先に発生した熊本地震の際に支援活動を行いました。以下、Luceというサークルについて、Luceが熊本地震の際に行ったことの二点について、この場をお借りして紹介させていただきます。

まず、Luceに関して簡単に説明いたします。Luceは東日本大震災の教訓を受け継ぎ、次の震災に向けた活動に活かし、被災地のために自分たちにできる支援を行うことを目標とする災害支援サークルです。

我々が現在行っている活動は大きく分けて3つあります。

1. 東海地域で起こりうる災害に備える。
2. 定期的に東北地方を訪問しボランティア活動を行い現地の状況の変化を追う。
3. 他地域で災害が起きた時に学生ボランティアとして活躍する。

具体的には、ボランティア活動の際に活かせるような搬送法などの技術を学ぶワークショップを開催したり、本学の救急部の先生方をお招きして講義をいただいたり、東北地方へボランティアに行ったLuceのメンバーによる報告会を行ったりなど、先に述べた目標を達成するべく常日頃から切磋琢磨しております。

今回の熊本地震を受けての活動は、Luceとしては初めての“亜急性期における組織だった被災地支援”でした。以下、Luceが熊本地震が起こった際に実際に活動したことについて紹介いたします。

我々Luceは発災直後から、震災に関する情報収集を行い、正確な被災地の状況を把握できるよう努めてまいりました。その上でLuceとしてできることはあるか、あるとしたら何かについてミーティングを行い、つぎの異なる三つのかたちで被災地を支援させていただくことにしました。

1. 直接的な被災地支援

熊本市災害ボランティアセンターを通じて活動をしました。内容としては物資の仕分け・介助の補助・子供達の相手や避難所運営の補助(掃除や傾聴、配膳)等、様々な活動を行いました。GW前の亜急性期に現地入りしたため統制が取りきれていない地域もありニーズも様々でした。ボランティアの母数が少ないうちから活動できたためLuceメンバーの貢献度も大きかったと推定出来ます。県庁を訪問し現地のボランティア運営についても学びました。

2. 物資支援

浜松市内のクリニックと連携をして熊本市への物資支援を行いました。食料(飲料水、缶詰等)や日用品(トイレットペーパーや紙オムツ・マスク等)の募集をかけました。学生だけでなく学内の先生方、学務課の方々からも支援をいただき多くの物資支援を行えました。

3. 募金活動

他大学(聖隷クリストファー・常葉・浜松学院)と合同で浜松駅にて募金活動を行いました。学内においても募金箱を設



学生ボランティアとして地震防災訓練に参加(左が筆者)

置し支援金を募っています。他大学との共同募金では非常に多くの方のご厚意により寄付金をいただくことができました。集まった寄付金は、熊本県の社会福祉協議会を通じて現地に寄付いたしました。

将来起こりうる災害に対して対応できる人材を育成し、浜松が被災した際に病院や地域の支援を効果的に行えるようになるため、一連の活動を通じて得た経験を活かしながら、今後も積極的に各活動に取り組んでいきたい所存です。

最後に、今回のLuceの活動は非常に多くの方々のご支援、ご協力があってこそ成り立っているものでした。この場をお借りしてLuceを支えてくださった皆様に御礼申し上げます。



熊本 ボランティア受付場所



熊本 ボランティア支援集会



熊本地震物資支援



浜松駅前 募金活動



ADROロゴは「くまモン」がモチーフ